

55

占領期日本の「公衆衛生列車」運行に関する考察

—「衛生展覧会」との関係について—

田中 誠二¹⁾、杉田 聡²⁾、丸井 英二³⁾¹⁾新潟大学人文社会・教育科学系, ²⁾大分大学医学部, ³⁾人間総合科学大学

【研究の背景】本報告では、占領期日本における「公衆衛生列車」(Public Health Train)について考察する。公衆衛生列車とは、当時、衛生知識の普及・啓蒙を目的として全国各地を巡回した列車で「衛生移動展」などとも呼ばれた。これまでの調査で、(1)公衆衛生列車の運行は厚生省主催で実施されたが、占領軍(特に公衆衛生福祉局(PHW)と民間情報教育局(CIE))がこれに深く関与したこと、(2)列車は3両編成、そのうち2両が展示車両として公衆衛生・福祉に関する模型や写真、ポスター、図などが陳列されたこと、(3)1947(昭22)年11月1日に東京・原宿駅をスタートして関東地方における巡回展示を開始し、その後、約1年間で全国の主要都市を巡回する旅程が組まれたことなどを明らかにした。児童・生徒を含む多くの人びとが観覧に訪れ、また、列車の前に設営されたテントでは地元の医師会や保健所等の職員が協力し、性病相談(VD Consultation)や結核検査(TB examination)、スライド上映(Lantern slide show)を実施するなど、1つの“健康イベント”を形成した事例も確認されている。

【目的】本報告では、戦後占領期に企画・実施された「公衆衛生列車」の巡回展示を、明治期から全国各地で催された「衛生展覧会」との関係性に着目し検討する。

【方法】国立国会図書館憲政資料室に所蔵されているGHQ/SCAP文書や当時の新聞・雑誌に掲載された関連記事を探索・収集した。衛生展覧会については、田中聡「衛生展覧会の欲望」(青弓社、1994年)などの既存の先行研究を整理し、検討材料とした。

【結果と考察】1948(昭23)年1月に発行された雑誌『科学画報』(第37巻1号、14頁)には、“スタートした公衆衛生列車”というタイトルで紹介され、厚生省の担当者として「石垣技官」へのインタビュー記事がまとめられた。石垣技官とは、のちに医事評論家として活躍した石垣純二(1912-1976)と推測される。彼はここで、「陳列についても、従来、衛生展というと好気心(原文ママ)に訴えるようなものが多いが、そのような暗い方法はやめて、明るい楽しい衛生展を心がけ」たことを語った。彼が言う「従来」の「暗い方法」とは、“教育のために”をタテマエとしながらも見世物性が強く、解剖模型や胎児標本など好奇の対象として見学されることの多かった「衛生展覧会」を指すものと考えられる。明治期から各地で開催された「衛生展覧会」とは意識的に差別化を図ろうとした担当者の意思が読み取れる。一方、公衆衛生列車における実際の展示にあたっては、戦前より各地の「衛生展覧会」に多くの所蔵資料を貸し出していた「赤十字博物館」(1926年「参考館」として創設、1932年に改称)から複数の資料提供を受けていることから(「日本赤十字社史稿」第6巻、395頁、1972年)、「衛生展覧会」と完全に切り離されて独自に展開されたものとは考えにくい。

アメリカでは、1916年に列車を利用して公衆衛生に関する展示会が開催されたとの報告がある(Ostherr, 2005)。占領期日本における「公衆衛生列車」運行のアイデアが、GHQ/SCAPによってアメリカから導入された可能性を窺わせるが、実情はそう単純ではなさそうである。戦前から存在した衛生教育活動の日本の展開のなかで、「公衆衛生列車」がどのように位置づけられるのか、今後さらなる検討を行う。

本研究は、日本学術振興会科学研究費 若手研究(B)「占領期日本の学校における感染症対策に関する実証的研究」(研究代表者:田中誠二)、基盤研究(C)「占領軍公衆衛生福祉局と厚生省との協同・対立に関する考察—GHQ文書による検証」(研究代表者:杉田聡)の成果の一部である。